

川崎ジュニア文化大賞受賞作品

「ばあばと暮らすやさしい川崎の町」

川中島小学校 6年生 中村 実生

私は「おばあちゃん子」。おばあちゃんは二人いて、冬に赤いダウンを着ている“赤いばあば”と、下にいる“下のばあば”です。遊んでもらったり、おしゃべりをしながら一緒におやつを食べたりする時間が、私は大好きです。“赤いばあば”は、まだ元気もりもりだけど、もうすぐ八十八才になる“下のばあば”の事が、最近少し心配です。

今、高れい者ドライバーの事故が増えてきて、免許返納の話がよくされていますが、下のばあばも二年前、家族会議の結果、自転車に乗るのをやめました。それまでは「自転車に乗れば二十才の娘」と言って、どこにでも出かけていったのに、取りあげてしまうのは少しかわいそうだと思ったけれど、すばやく判断したり、体を動かすのが難しくなってきたので、仕方ないのかな。事故やけがを未然に防げたのは本当に良かったのだろうけど、それからばあばは、足が痛いと言って、あまり外に出かけなくなりました。

いつもうちに遊びにきてくれていたお茶のみ友達が一人また一人と亡くなり、部屋でテレビを見ながら一人でお茶を飲んでいる姿を、多くみるようになった。それに、数年前まで二階に住む私たちの所まで上がって来てくれたのが、今はもうできない。私にとってはたった十三段でも、ばあばにとっては、果てしなく遠い十三段なんだ。

ばあばは「一緒に住んだことがないと、高れい者にとってどんなことが大変なのか、分からないんだよ。」と言う。だから私は、思いやりの心を持ちたい。相手の身になって考える、想像力を持ちたい。

行きつけのお店があるわけでもなく、これから新しい友達を作るのはおっくう。そんなばあばが、どうすれば外の世界と交流できるかなと、お母さんと話し合ってみました。

一つ目は、ばあばの大好きな庭いじりを、一緒にやってみること。いつも玄関ポーチをのぼりおりする時、「痛ててて」と言っているので、土や道具を運んであげたら少しは役に立つのかな。私はお花の上手な育て方を教えてもらえるから、どちらもハッピー。ご近所さんとのおしゃべりが増えるきっかけになるかもしれません。

二つ目は、うちから出発する町内の回覧板に、誰でも書ける“つぶやきノート”をつけられたらいいな。例えば、「お豆腐屋さんのサーターアンダーギーがおいしい」とか「業務スーパーの店先の野菜がすごく安い」と分かったら買いに行きたくなる。お得情報は歓迎、小さい子は絵でもいいことにしよう。ばあばは「うちのサボテンの白い花がもうすぐ咲きます」とか書くかな。それを読んだ人が見に来て

くれたらうれしい。

川崎は、若い世代に人気が出て人口が増え続け、今年、政令指定都市で第六位になったと聞きました。高れい者を支える若い世代の人が増えたのは、とてもうれしいニュースです。私たちが「令和」という新しい時代を担う一人であるという自覚を持って、大好きな川崎をもっとみりよくある、みんなに自まんでできる町にすることが、私の夢です。